

本と私——あとがきにかえて

本を読み始めて六十年あまり。時間と金のかかる趣味・道楽には無縁な人生で、自然、本だけは数多く読むことになった。むろん商売上の必要に迫られて手を出す場合も多かったが、いちど取りかかると、読む楽しみにふけて、肝心の目的を見失うこともしばしば起きた。

逆もある。こんなことを書いてある本を読みたい、こんな風な研究書があればいいのに。そんな思いであれこれ目を通してみるが、これという本に出会わない。やむをえないから自分で書いてみるかと思つたことも数知れない。『英国貴族と近代』（東京大学出版会）がそのはじまりだが、売れもせず、評判もぱつとしない本を数多く、多分野にわたつて書くことになったのも、裏返した意味では読書の産物である。

「江分利満氏の優雅な終局」でも触れたように、へボな将棋に打ち込んだ時期がある。自分で指してみても初めて、プロの芸というものの片鱗を窺い、味わうことができる。指してみても、自分の下手さ加減もよくわかり、何時しか熱は冷めたが、そのころから書いた物が本になりはじめた。こち

らのほうも、将棋同様お下手ではあったが、曲がりなりにも商売だからやめるわけにはいかない。何をどう書けば読んで、理解していただけるか、その苦労は今も続くが、下手ながらも書く苦渋を重ねているうち、よそさまがお書きになったものについても、その苦労や舞台裏がおおよそは察せられるようになった。将棋は指してみても、本は書いてみて、プロの芸が身に染みる。

口幅つたい物言いで恐縮するが、事情に通じない他分野の研究書などでも、文章を見るだけで、ご当人の資質と修練のほどはおおよそ想像できた。英語については、同じように言えるまでには到らなかった。ただ、多少は土地勘のある歴史について言わせていただければ、英国と較べて日本には、ほればれするような練達の文章を書く人ははるかに少ないように感じる。岡先生も言われるように（「一瞬は長く、人生は短い」、文体は思考様式だから、日本の歴史家には、練達・熟練と呼ぶような歴史感覚が乏しいのだろう。読む機会はなかったが、司馬遼太郎さんの「歴史物」にフアンが絶えない大きな原因も、そのあたりにあるのだろう。もともと英国でも、近年歴史の文体にかげりが見られるように思う。東も東、西も西。

文体の問題を意識したのは、高校入学早々新聞部に連れ込まれ、埋め草を書かされたのが最初で、それから半世紀になる。機会があつて、文体について日頃感じていることを、「絵の文章 音の文章」と題する短いエッセイにしたことがある（『文藝春秋』二〇〇〇年九月号）。テニヲハに一字誤りがあつて、誤解の余地を残した。この機会を借りて誤植を訂正し、以下に再録させていただく。

\*  
\*

ひとさまが書かれた文章を読むのを商売にきて、時々考える。よい文章にもいろいろあるが、文章のスタイル、いわゆる文体を言うなら、絵画型と音楽型を区別してみるのはどうだろうか。

思いつき程度のこと、厳密な話ではない。分類することに多少の意味があるにしても、どちらにも属さないとか、どちらとも言える文章も多いだろう。出だしから腰の据わらない話で恐縮だが、ほかにも似たことを言う人がいないわけではない。

『パーキンソンの法則』で知られるパーキンソンには自伝があつて、翻訳も出ている。そのなかで、ロングセラーを出すので知られた歴史作家アーサー・ブライアントの文章に触れている。「ブライアントは、絵筆を持つたらさらに幸福であり、人でいっぱいの舞台の上で、俳優たちを思い通りの場所に配置している時なら、たぶん最高に幸福だろうと思われようなペンの使い方をしている」と評したうえで、「抽象的な叙述がたちまち視覚的なイメージに移り変わっていく点」にその精髓があると言う。

たぶん、同じことがパーキンソン自身にもあてはまるだろう。父親の影響で、小さな頃から絵画や演劇に親しみ、成人後も、学者でなければ画家になるというくらい絵や舞台芸術に入れ込んだ。そのパーキンソンを読まれた方なら、「法則」という一見抽象的な議論を、「たちまち